

現代中年期女性は女性性をどのように捉えているのか — 質問紙調査による女子青年との比較 —

瀬戸山 聡子・藤崎 春代

How do middle-aged and young women in contemporary Japan understand femininity ?

Akiko SETOYAMA and Haruyo FUJISAKI

How do middle-aged women in contemporary Japan understand the concept of femininity? Young women (n=118) and their middle-aged mothers (n=118) participated in a study, in which the Femininity Consciousness Scale (FCS) was developed and used to identify four factors: "Personal Magnetism," "Traditional Image," "Appearance and Looks," and "Negative Image." Results indicated that middle-aged women did not attach as much importance to Appearance and Looks as did young women. Moreover, the self-evaluation of middle-aged women was below the average. The Attitudes toward 'Femininity' Scale (AFS) was also developed and two factors, "Affirmative Attitude" and "Negative Attitude" were identified. Results indicated that Affirmative Attitudes were not high and Negative Attitudes were low in which group of women. Results of correlation analysis between the FCS and AFS indicated that there was a positive correlation between there was a positive correlation between Affirmative Attitude, Personal Magnetism and Traditional Image of young women, and that Affirmative Attitude and Negative Attitude were positively correlated with Negative image in middle-aged women. These findings suggest that the relationship between attitudes and consciousness about femininity in contemporary Japan is different in different generations of women.

Key words : middle-aged woman (中年期女性), femininity (女性性), consciousness of femininity (女性性意識), attitudes about 'femininity' (「女らしさ」に対する態度), efforts improving the appearance (容姿向上努力)

問題と目的

女性性 (femininity) とは、一般的に女性らしさや女性的なイメージの総体、女性に望ましい特性と捉えられている (江原・長谷川・山田・天木・安川・伊藤, 1989 ; 神田, 1993) が、厳密な定義は困難である。油井 (1995) は、女性性概念が政治経済や文化レベル、所属する集団や個人によって異なり、さらに時代的な変遷によっても変転する可能性を指摘する。瀬戸山 (2009) は、女性性についての心理学および近接領域の学問での実証的先行研究をレビューし、女性性概念の把握の仕方や具体的内容、その測定方法を整理した。その

結果、心理学研究において女性性を測定する尺度項目の特徴として、日本国内で開発された尺度には「かわいい」「色気のある」「おしゃれな」などの外見に関する項目が含まれていることが明らかとなった。また教育学や教育社会学での先行研究において、近年の特徴として「手段としての女性性」と呼べるような、自分のライフコース設計の中に女性性を生かしていく視点が見出された。さらに今後の課題として、1. 今までの研究および既存尺度の多くが主に若い世代 (中学生～大学生) を対象としてきたこと、2. 従来社会的に望ましい女性性や理想とする女性性が検討されてきたものの、それらが実際個々人が考える女性性が

どうかは不明であること、3. 生涯発達の視点より「人生の中間地点」に当たる中年期女性に注目した場合、この年代における女性性研究がまだ十分とはいえないことが示された。

そこで本研究では、上記瀬戸山(2009)が指摘している課題より、現代日本の中年期女性が女性性をどのように意識し、また女性性に対してどのような態度をもつかを把握することを目的とする。

具体的には、まず女性性意識に関する検討で、女性性意識尺度(the Femininity Consciousness Scale 以下、FCS と記す)を開発する。その際、参考にする既存尺度は瀬戸山(2009)にて検討された性役割尺度のうち、初期の性度テスト

(MMPI や CPI など)は対象外とした。なお、性役割については様々な側面や分類方法が指摘されている(飯野, 1984; 伊藤, 1997; 鈴木, 1991 など)が、本研究では鈴木(1991)の分類-性役割採用(性による顕在的行動特性)、性役割発達(自分の性にふさわしい役割の習得)、性役割同一性(自分自身の男性/女性性についての知識)、性役割選好(性に関連した行動を採用する願望)、性役割態度(性役割に関する問題に対する態度)、男性性(masculinity)・女性性(femininity)・両性具有(androgyny)などを採用し、女性性項目と両性具有項目を、また女性性研究でたびたび比較対象とされる母性についての項目も含むこととした。

次に「女らしさ」に対する態度に関する検討を行い、女性が女性性という概念にどのような印象をもっているかを明らかにする。林(2005)は、男性役割に対する態度と感情制御との関連を検討する際、メタ(meta)な観点からの把握が必要であると述べている。それは、具体的次元の対象を一段高い抽象的次元から俯瞰して把握することであり、具体的には「男性役割」という概念を抽象的、若しくは日常用語として浸透している「男らしさ」という語に置き換え、その語に対する態度を測定する尺度を開発した。その際、項目選定で「男/女らしさ」に対して肯定的態度および否定的態度を表す項目を収集し、「女らしさ」の語を「男らしさ」に書き換えている。従って、本研究でもその考え方を採用し、林(2005)の「男らしさ」に対する態度尺度(the Attitudes toward 'Masculinity' Scale 以下、AMS と記す)の各項目の「男らしさ」を「女らしさ」に書き換えて用

い、「女らしさ」に対する態度尺度(the Attitudes toward 'Femininity' Scale 以下、AFS と記す)を開発する。

最後に FCS と AFS の関係を検討することにより、女性性についての意識と態度の関連を明らかにする。

調査にあたり、まず中年期女性の比較対象としては、多くの先行研究にて対象とされている女子大学生を、中年期女性としてはその母親を対象として、両世代の女性性についての捉え方を検討した。

方法

1. 調査対象

都内某私立女子大学生・大学院生および同年代の知人女性(以下、娘世代と記す)118名と、その母親および同年代の女性(以下、母親世代と記す)113名で、合計231名。回収数は181(娘世代93、母親世代88、回収率78.35%)であった。そのうち、フェイスシートに記入漏れがなく各尺度に対して概ね9割以上回答されているものを有効回答とし、その後の分析対象とした。その結果、有効回答数は176(娘世代90、母親世代86、有効回答率76.19%)で、平均年齢は、娘世代20.66歳($SD=3.04$)、母親世代49.01歳($SD=4.84$)となった。娘世代は、大学学部生63名から大学院生(修士課程と博士後期課程)27名が含まれていた。母親世代は、常勤職24名、非常勤職34名、自営業7名、専業主婦24名であった。ただし今回は、娘世代については学年別、母親世代については就業状況別、および両世代について居住状況別の分析は行わず、これらについては今後の課題とする。

2. 調査実施時期および手続き

2008年10月~11月に質問紙調査を実施した。質問紙の配布は、授業時間を利用した娘世代への直接配布・娘よりその母親への間接配布と郵送・知人への直接配布・知人を介した間接配布と郵送により行った。回収は、授業時間中の手渡し・返信用封筒による郵送・上記大学内に設置した回収ボックスにて行った。

3. 質問紙の構成

1) フェイスシート

年齢・同居者の人数/続柄(パートナー(夫・

恋人)・子・父・母など)を両世代に、また、娘世代にのみ学部・学科・学年を、母親世代にのみ主な活動(常勤職・非常勤職・自営業・専業主婦など)を訊ねた。

2) 女性性意識の測定

瀬戸山(2009)より、Bem(1974)の Bem Sex-Role Inventory (BSRI)、Spence, Helmreich & Stapp(1975)の The Personal Attributes Questionnaire (PAC)、Heilbrun(1976)の The Masculinity-Femininity Scale of the Adjective Check List (ACLの男性性/女性性尺度)を翻訳した東(1986)、日本国内で女性性尺度を開発した先行研究(石田1994;伊藤,1978;伊藤1986;柏木,1974;山口,1985)および女性性意識を検討した先行研究(石崎・石崎・桂・織田・日暮・原,1996;岩谷,2001)の、女性性・母性・両性具有(伊藤,1978の人間性(H: Humanity)項目も含む)項目をもとに、48項目を選定した。教示で(1)世の中の多くの人が考える女らしさとしての重要度(以下、[世の中]と記す)、(2)対象者本人が考える女らしさとしての重要度(以下、[自分自身]と記す)の2種類について、6段階評定(全く重要でない:1点、あまり重要でない:2点、やや重要でない:3点、やや重要である:4点、かなり重要である:5点、非常に重要である:6点)で回答を求めた。

3) 「女らしさ」に対する態度の測定

林(2005)が開発したAMSの52項目について、質問文中の「男らしさ」を「女らしさ」に書き換えて用いた。教示では、普段の被検者に最も近い態度をAMSと同様の4段階評定(あてはまらない:1点、どちらかというにあてはまらない:2点、どちらかというにあてはまる:3点、あてはまる:4点)で回答を求めた。

結果と考察

1. 女性性意識に関する検討 (FCSの開発)

1) FCSの因子分析

[世の中]の全48項目の平均値に対し、平均値±標準偏差が回答選択肢の上限/下限値を超えているか否かを確認したところ、全ての項目が上限/下限値以内となった。次に探索的に因子分析(主因子法、共通性の初期値1)を実施し、スクリープロットより因子数4が妥当であると判断した。

そして、改めて因子分析(主因子法、プロマックス回転)を実施したところ、.40以上の因子負荷量を基準に45項目が抽出された。結果の詳細をTable1に示す。なお「既存尺度との照合」欄は、当該項目が、もとになった既存尺度にて女性性(F)・母性(M)・両性具有(H)のどれに該当していたかを表す。

第I因子は「強さのある」「自分に責任をもてる」「頭の良い」など、性別に左右されない特性を表す19項目から構成されていることから、【人間的魅力】と命名した。既存尺度の項目内容と照合したところ、両性具有項目が多いことが示された。第II因子は「やさしい」「家庭志向的である」「情緒的である」など、伝統的に女性性と考えられる14項目から構成されていることから、【伝統的イメージ】と命名した。既存尺度の項目内容との照合では、女性性項目と母性項目がおおよそ半分ずつを占めていた。第III因子は「きれいである」「おしゃれである」など、外見的魅力を表す8項目から構成されているため、【容姿・容貌】と命名した。この因子では、既存尺度の項目内容は「美しい」を除き、全て女性性項目であった。第IV因子は「しつと深い」「すぐに泣く」などの否定的なイメージ4項目から構成されていることから、【否定的イメージ】と命名した。この因子の場合も、既存尺度では「しつと深い」を除き、全て女性性項目であった。

2) FCSの尺度得点

Cronbachの α 係数は.786~.929となり、尺度内の内的整合性が示された。従って、全45項目の総得点の平均値を女性性意識総得点、各因子の項目得点の平均値を下位尺度得点として、[世の中][自分自身]それぞれについて得点を算出した(Table2)。

尺度得点は、全体的に尺度上の「やや重要である:4点」と「かなり重要である:5点」の間の値を示しており、今回の対象者は全体的に、女性性意識を中程度に重要と意識していると考えられる。また、【否定的イメージ】尺度得点のみ、世の中が2.86($SD=1.01$)、自分自身が2.41($SD=.93$)で尺度上の「あまり重要でない:2点」と「やや重要でない:3点」の間を示すことから、否定的イメージは女性性意識としてあまり重要でないと考えられていることが推察される。

Table1 女性性意識尺度の因子分析結果（主因子法、プロマックス回転）と既存尺度との照合

	I	II	III	IV	共通性	既存尺度との照合(注)
第I因子: 人間的魅力 $\alpha=.929$						
25 強さのある	.87	-.18	.15	.05	.65	M
26 自分に責任をもてる	.86	-.04	-.05	-.05	.75	H
17 厳しさのある	.79	-.01	-.12	.11	.61	M
18 健康である	.79	-.13	-.01	-.14	.63	H
12 視野の広い	.78	.04	-.11	-.06	.69	H
46 頭の良い	.77	-.19	.21	-.03	.50	H
11 たくましい	.76	-.13	-.02	.08	.50	M
40 自分の生き方のある	.75	-.11	.13	-.16	.57	H
28 想像力豊かである	.71	-.03	.01	.25	.48	H
14 忍耐強い	.69	.12	-.17	.10	.56	H/M
34 自分を大事にする	.67	-.08	.08	.04	.40	H
44 楽天的である	.64	-.18	.13	.17	.33	H
23 社交性に富んでいる	.59	.01	.12	.01	.35	H
31 心の広い	.56	.33	.07	.00	.57	H
9 協調性がある	.55	.16	.00	.00	.39	H
48 人と協力する	.55	.37	-.07	.01	.57	H
21 正直である	.48	.31	-.24	-.03	.46	H
3 誠実である	.47	.29	-.10	-.06	.41	H/F
15 明るい	.47	.31	.10	.03	.44	H/F
第II因子: 伝統的イメージ $\alpha=.852$						
24 やさしい	-.13	.72	.14	-.14	.58	F/M
6 思いやりがある	.12	.62	-.01	-.22	.49	F/M
10 繊細である	-.24	.61	-.03	.20	.38	F
13 言葉使いが丁寧である	.18	.58	-.10	.02	.40	F
5 あたたかい	.06	.57	.18	-.14	.47	M/H
36 愛情深い	-.04	.55	.31	-.18	.52	M
47 子ども好きである	-.04	.54	.08	.12	.35	F
43 家庭志向的である	-.07	.52	.15	.18	.41	F
20 育児に向いている	.03	.52	-.02	.13	.30	M
22 人の気持ちを理解する	.34	.51	-.10	-.17	.53	F
33 かいがいしい	-.12	.48	.07	.20	.31	M
19 情緒的である	.12	.47	-.11	.16	.26	F
2 献身的である	-.03	.46	.12	.00	.27	M/H
32 従順である	-.01	.46	.14	.29	.41	F
第III因子: 容姿・容貌 $\alpha=.867$						
29 きれいである	.01	.14	.77	-.04	.68	F
4 おしゃれである	.03	.07	.75	-.07	.58	F
16 美しい	-.03	.10	.69	-.04	.53	F/H
7 色気がある	-.17	.01	.67	.11	.57	F
45 魅力的である	.20	.08	.66	-.07	.49	F
1 かわいい	.09	-.02	.55	-.04	.28	F
35 服装や髪型に気を配る	-.02	.28	.53	-.01	.49	F
39 異性を意識する	.09	-.02	.46	.37	.43	F
第IV因子: 否定的イメージ $\alpha=.786$						
37 しつと深い	-.07	.14	-.07	.74	.55	H
38 だまされやすい	.06	.13	-.16	.69	.42	F
27 すぐに泣く	-.13	.11	.11	.68	.60	F
41 おだてにのる	.36	-.13	.06	.66	.45	F
因子間相関						
	I	II	III			
II		.36				
III		-.11	.44			
IV		-.22	.05	.34		

(注)「既存尺度との照合」欄の記号は、それぞれ既存尺度のM: 女性性、F: 母性、H: 両性具有項目を示す。
H/Mのように併記されている場合は、既存尺度によって異なる複数の内容をもつ項目である。

Table2 女性性意識尺度得点と標準偏差

	世の中	自分自身
女性性意識総得点	4.19(.50)	4.18(.53)
I.人間的魅力	4.09(.79)	4.39(.76)
II.伝統的イメージ	4.54(.60)	4.45(.57)
III.容姿・容貌	4.56(.71)	4.11(.74)
IV.否定的イメージ	2.86(1.01)	2.41(.93)

()内の数値は標準偏差を表す。

3) 女性性意識の比較 (世代間および[世の中][自分自身]間による差の検定)

女性性意識総得点および各下位尺度得点に対し、2 (世代：娘世代・母親世代) × 2 (評価点：[世の中]・[自分自身]) の2要因の分散分析を実施した (Table3)。

その結果、女性性意識総得点では、世代による有意な主効果 ($F(1, 174)=7.23, p<.01$) のみが見られ、娘世代が母親世代に有意に高い結果となり、娘世代の方が母親世代と比較して、より女

性意識を重要と感じていることが示唆される。

因子別の尺度得点については、【人間的魅力】尺度得点では、評価点による有意な主効果 ($F(1, 174)=46.38, p<.001$) と、有意な交互作用 ($F(1, 174)=7.85, p<.01$) が認められた。結果を Figure1に示す。交互作用が有意であったことから単純主効果の検定を行ったところ、世代において娘世代・母親世代ともに評価点による単純主効果が有意であり、[自分自身]の方が高かった (それぞれ $F(1, 174)=8.22, p<.01$; $F(1, 174)=45.16, p<.001$)。評価点における世代による単純主効果の有意差は見られなかった。つまり【人間的魅力】については、娘世代・母親世代ともに世の中と自分自身との間に女性性意識についてズレがあり、世の中一般で考えられているより自分自身の方が重要と感じていると推察される。【伝統的イメージ】尺度得点では、世代および評価点による有意な主効果が認められ (それぞれ

Table3 世代と評価点による女性性意識尺度得点の分散分析結果

世代 評価点	娘世代(n=90)		母親世代(n=86)		主効果		
	世の中	自分自身	世の中	自分自身	世代	評価点	交互作用
女性性意識総得点	4.31(.53)	4.26(.52)	4.08(.45)	4.10(.53)	7.23**	.16	1.73
I.人間的魅力	4.17(.79)	4.35(.72)	3.99(.78)	4.42(.80)	.29	46.38***	7.85**
II.伝統的イメージ	4.69(.60)	4.55(.57)	4.38(.57)	4.35(.56)	12.40**	3.91*	1.43
III.容姿・容貌	4.71(.69)	4.36(.72)	4.41(.70)	3.84(.67)	19.45***	82.18***	4.92*
IV.否定的イメージ	2.94(.99)	2.54(.87)	2.78(1.03)	2.28(.97)	2.38	56.78***	.66

()内の数値は標準偏差を表す。

*** $p<.001$,** $p<.01$,* $p<.05$

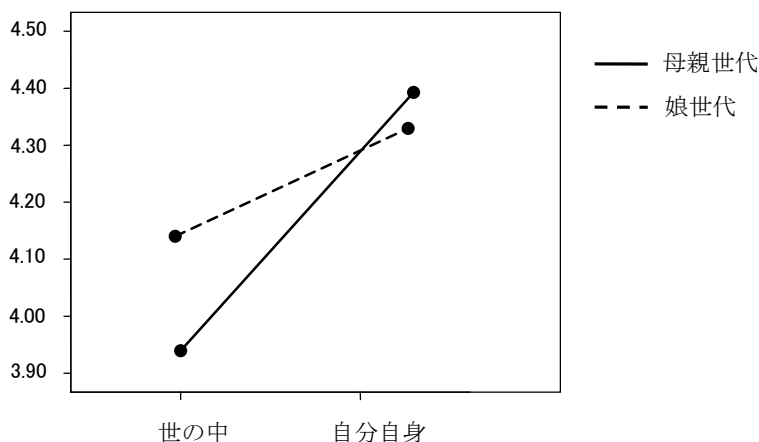


Figure1 世代と評価点による【人間的魅力】尺度得点の平均値

$F(1, 174)=12.40, p<.01$; $F(1, 174)=3.91, p<.05$)、娘世代の方が母親世代と比較して、[世の中]の方が[自分自身]と比較して、それぞれ有意に高い結果となった。つまり【伝統的イメージ】については、娘世代の方が母親世代より女性性意識として重要と感じていることと、個々人の中で自分自身より世の中一般として重要視されていると感じていることが示唆される。【容姿・容貌】尺度得点では、世代および評価点による有意な主効果（それぞれ $F(1, 174)=19.45, p<.001$; $F(1, 174)=82.18, p<.001$ ）と、有意な交互作用（ $F(1, 174)=4.92, p<.05$ ）が認められた。結果を Figure2に示す。交互作用が有意であったことから単純主効果の検定を行ったところ、世代において娘世代・母親世代ともに評価点による単純主効果が有意であり（それぞれ $F(1, 174)=23.99, p<.001$; $F(1, 174)=62.24, p<.001$ ）、[世の中]の方が高かった。さらに評価点においても[世の中]・[自分自身]ともに世代による単純主効果が有意であり（それぞれ $F(1, 174)=7.77, p<.01$; $F(1, 174)=24.35, p<.001$ ）、娘世代の方が高かった。つまり【容姿・容貌】については、個々人の中で娘世代・母親世代ともに自分自身より世の中一般の方が女性性として重要視していると感じており、かつ、世の中一般でも自分自身でも娘世代の方が母親世代と比較してより重要視していると考えられる。【否定的イメージ】尺度得点では、

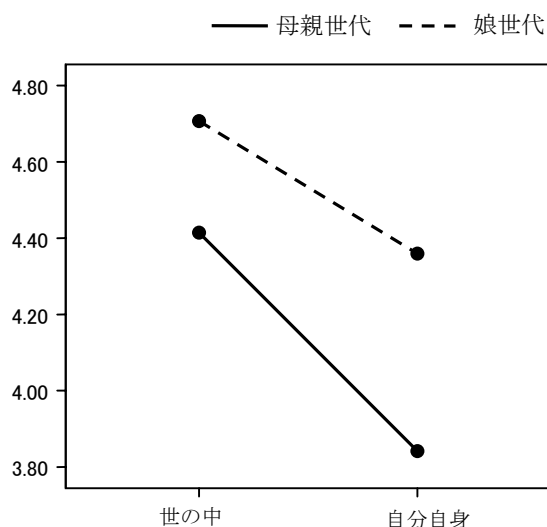


Figure2 世代と評価点による【容姿・容貌】尺度得点の平均値

評価点による有意な主効果（ $F(1, 174)=56.78, p<.001$ ）のみが認められ、[世の中]の方が[自分自身]と比較して有意に高い結果となった。つまり【否定的イメージ】は、娘世代であれ母親世代であれ、自分自身より世の中一般の方が女性性意識として重要と考えていることが示唆される。

これらの結果より、母親世代は全体としては娘世代よりも女性性を重要と感じていないことが示された。また両世代ともに、【人間の魅力】は世の中一般で考えられているよりも自分自身の方がより重要視していると考え、【容姿・容貌】【否定的イメージ】は、世の中一般で考えられているよりも自分自身の方がより重要視していないと考えていることがわかった。特に、【容姿・容貌】では全ての主効果と交互作用に有意な結果が出たことから、母親世代は外見の魅力について娘世代よりも、そして自分としても世の中一般で考えられているよりも重要と感じていないことが推察される。

2. 「女らしさ」に対する態度に関する検討 (AFSの開発)

1) AFSの因子分析

全52項目の平均値に対し、平均値±標準偏差が回答選択肢の上限/下限値を超えているか否かを確認したところ、8項目が上限/下限値を超えていた。しかしこれらの数値が全て僅か（平均点±標準偏差の値が.30以内）であることから、全項目を分析対象とすることとした。次に探索的に因子分析（主因子法、共通性の初期値1）を実施し、スクリープロットより因子数2が妥当であると判断した。そして、改めて因子分析（主因子法、バリマックス回転）を実施したところ、.40以上の因子負荷量を基準に35項目が抽出された。結果の詳細を Table4に示す。

第I因子は「自分の女らしさを認識したいと思う」「異性/同性から『女らしい』と言われたい」「女らしい服装を好んで身につける」など、「女らしさ」に対して肯定的な態度を示していると考えられる21項目から構成されていることから、【肯定的態度】と命名した。第II因子は「女らしさから逃げ出したい」「女らしさを追求することはみっともない」「女らしさはもはや時代遅れであると思う」など、「女らしさ」に対して否定的な態度を示していると考えられる14項目から構成されていることから、【否定的態度】と命名した。

Table4 「女らしさ」に対する態度尺度 (AFS) 因子分析結果 (主因子法・バリマックス回転)

	I	II	共通性
第 I 因子: 肯定的態度 $\alpha=.921$			
10 自分の女らしさを認識したいと思う	.79	.08	.63
24 異性から「女らしい」と言われたい	.77	-.04	.60
20 自分が女らしいかどうか気になることがある	.74	.21	.60
45 今の自分よりもっと女らしくになりたい	.72	-.02	.52
7 誰かに女らしさを学びたい	.72	.02	.52
26 女らしくなるためにどうすればよいか考えることがある	.71	-.05	.51
18 同性から「女らしい」と言われたい	.69	-.07	.48
29 何かをした後で、女らしくなかったなあと悔やむことがある	.66	.02	.43
33 女らしいと言われる人を見てうらやましいと思うことがある	.64	.05	.41
40 他の人とくらべて自分は女らしくないと感じて、気分が落ち込むことがある	.61	.16	.39
1 女らしさとは何か考えることがある	.59	-.15	.37
35 他の人の女らしいふるまいを見て自分に取り入れることがある	.58	-.22	.39
16 女らしさという基準で次の行動を決めることがある	.53	.13	.29
12 異性から「男っぽい」と言われると不快である	.52	.01	.27
11 自分の娘には女らしく育てほしい	.50	-.10	.26
52 一人前の女として人から認められたい	.49	-.05	.24
47 女らしい服装を好んで身につける	.48	-.06	.24
51 女らしくなるためには、努力が必要であると思う	.45	-.04	.21
5 女らしさにこだわっている	.44	-.06	.20
21 自分は女らしさにしばられているのではないかと思う	.44	.32	.29
46 女らしくなるためには、特別な体験が必要であると思う	.41	.28	.25
第 II 因子: 否定的態度 $\alpha=.868$			
37 女らしさから逃げ出したい	.18	.74	.58
17 女らしさはわずらわしい	.06	.67	.45
36 女らしさを追求することはみっともない	-.03	.66	.44
8 自分にとって女らしさは重荷である	.28	.65	.50
3 女らしさの話題には触れたくない	.00	.64	.40
38 女らしさを心がけることはばからしいと思う	-.10	.63	.41
13 女らしさはもはや時代遅れであると思う	-.12	.61	.39
22 女らしいという言葉は男女差別的である	-.07	.58	.34
32 女らしいと言われて、素直に喜べないことがある	-.02	.54	.29
31 女らしさとは無関係に生きていきたい	-.26	.54	.36
4 女らしさには関心がない	-.37	.48	.37
42 他の人の女らしい態度に反感をおぼえることがある	.14	.46	.23
44 魅力的な女性の条件として女らしさは必要ないと思う	-.18	.43	.22
43 自分の女らしいふるまいをわざとおさえることがある	.17	.43	.21
因子寄与	8.13	5.12	
因子寄与率(%)	23.13	14.63	
累積寄与率(%)	23.13	37.85	

なお、累積寄与率は37.85%となった。

次に、林(2005)の AMS との因子構造と内容を比較した。まず、因子構造は AMS・AFS とともに2因子を得、また因子名もともに【肯定的態度】【否定的態度】となった。

【肯定的態度】の内容を見てみると、AMS では「男(女)らしさに関心がない」「男(女)ら

しさとは無関係に生きていきたい」「魅力的な男(女)性の条件として男(女)らしさは必要ないと思う」がマイナスの因子負荷をもって含まれていたが、AFS の場合、これらは全て【否定的態度】に含まれていた。一方、「自分は女(男)らしさにしばられているのではないかと思う」「何かをした後で、女(男)らしくなかったなあと悔

やむことがある」などの項目も含まれ、それらは【否定的程度】にもプラスの因子負荷をもっており、肯定的とも否定的ともとれる態度の項目であると考えられる。その他、因子負荷量が.40に満たない項目および共通性が著しく低い項目について、AFS では筆者の判断で削除したので、その分、AMS と比較すると少ない項目数となった。

【否定的態度】の内容を見てみると、AMS では林 (2005) でも指摘されているように、「人から男 (女) らしいふるまいを期待されていると感ずることがある」「男 (女) らしい服装を好んで身につける」などの葛藤や肯定的態度と考えられる項目が含まれていたが、AFS では見られず、比較的すっきりした意味内容となった。その他、【肯定的態度】と同様、因子負荷量が.40に満たない項目および共通性が著しく低い項目について、AFS では筆者の判断で削除したので、その分、【否定的態度】についても AMS と比較すると少ない項目数となった。

2) AFS の尺度得点

Cronbach の α 係数はそれぞれ.921、.868となり、尺度内の内的整合性が示された。従って、各因子の項目得点の平均値を AFS の下位尺度得点として算出したところ【肯定的態度】尺度得点は2.25 ($SD=.55$)、【否定的態度】尺度得点は1.85 ($SD=.47$) となった。つまり尺度得点は、全体的に尺度上の「どちらかというとはまらない：2点」を中心に $\pm .15 \sim .25$ の間の値を示しており、今回の対象者は全体的に、女らしさに対して、肯定的態度・否定的態度ともにあまり当てはまらないと感じ、女らしさに対しては距離を置いているようである。

3) 「女らしさ」に対する態度の比較 (世代間での差の検定)

尺度得点については低いものの、世代間で AFS 各下位尺度得点について t 検定を実施した (Table5)。その結果、娘世代が【肯定的態度】尺度得点で母親世代に比較して有意に高かった。このことから、娘世代は母親世代と比較して、女らしさに対する【肯定的態度】が高いことが示唆される。一方、【否定的態度】尺度得点では、世代による有意差は認められなかった。

各尺度得点についての分析から、【肯定的態度】尺度得点については、娘世代は2.43 ($SD=.54$) で、母親世代は2.06 ($SD=.49$) であった。すな

Table5 「女らしさ」に対する態度各下位尺度得点の t 検定結果

世代	I (SD)	II (SD)
①娘世代(n=90)	2.43(.54)	1.82(.49)
②母親世代(n=86)	2.06(.49)	1.87(.46)
F値	.74	.48
t値 (df)	4.70*** (174)	.68 (174)
結果	①>②	

()内の数値は標準偏差を表す。

*** $p < .001$

わち尺度上で考えると、娘世代は「どちらかというとはまらない：2点」と「どちらかというとはまる：3点」とのほぼ等距離上に位置し、母親世代はほぼ「どちらかというとはまらない：2点」上となる。また【否定的態度】尺度得点は、娘世代は1.82 ($SD=.49$) で、母親世代は1.87 ($SD=.46$) であった。すなわち尺度上で考えると、娘世代・母親世代ともに「どちらかというとはまらない：2点」未満の殆ど同じ位置となることがわかる。つまり、娘世代であれ母親世代であれ、女らしさに対して【否定的態度】は殆どもっていないと思われ、かつ、【肯定的態度】についてもあまり重視しているわけではないことが示唆される。これらのことから、現代日本女性は全体的には女らしさに対して距離を置いているものの、娘世代の方が母親世代と比較するとやや肯定的な態度をもっていると考えられ、それに対して母親世代は【肯定的態度】であれ【否定的態度】であれ、女らしさに対して親和的でないことが確認された。

3. FCS と AFS の関係の比較 (各下位尺度間の相関分析)

FCS と AFS の関係を明らかにするために、両尺度の各下位尺度間の Pearson の積率相関係数を算出した (Table6、Table7)。

母親世代は、FCS[世の中]の【人間的魅力】【否定的イメージ】および FCS[自分自身]の【否定的イメージ】と、AFS の【肯定的態度】との間でそれぞれ有意な正の相関 ($r=.234, p<.05$; $r=.294, p<.01$; $r=.454, p<.001$) が認められた。また、FCS[世の中]の【否定的イメージ】および FCS[自分自身]の【否定的イメージ】と、AFS の【否定的態度】との間でそれぞれ有意な正の相関 ($r=.256, p<.05$; $r=.213, p<.05$) が認められた。つまり母親世代は、女らしさに対する

Table6 尺度間相関分析結果(母親世代(n=86))

	女性性意識(世の中)				女性性意識(自分自身)			
	I.人間的 魅力	II.伝統的 イメージ	III.容姿・ 容貌	IV.否定的 イメージ	I.人間的 魅力	II.伝統的 イメージ	III.容姿・ 容貌	IV.否定的 イメージ
「女らしさ」に対する態度								
I.肯定的態度	.234*	.035	-.096	.294**	-.014	-.170	.107	.454***
II.否定的態度	.005	.075	-.046	.256*	-.175	-.152	-.135	.213*

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Table7 尺度間相関分析結果(娘世代(n=90))

	女性性意識(世の中)				女性性意識(自分自身)			
	I.人間的 魅力	II.伝統的 イメージ	III.容姿・ 容貌	IV.否定的 イメージ	I.人間的 魅力	II.伝統的 イメージ	III.容姿・ 容貌	IV.否定的 イメージ
「女らしさ」に対する態度								
I.肯定的態度	.379***	.032	.028	-.008	.314**	.281**	.145	.176
II.否定的態度	-.028	.096	.072	.204	-.062	-.088	-.134	-.075

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

肯定的態度と世の中では「強さのある」「自分に自信のもてる」などの人間的魅力と関連が高いと考え、かつ、世の中でも自分自身の中でも、女性性のうちで「しっと深い」「だまされやすい」などのいわゆる否定的イメージとも関連が高いと考えていると推察される。そして、女らしさに対する否定的態度といわゆる否定的イメージと関連が高いと考えていることも示唆される。なお、「やさしい」「思いやりがある」などの伝統的イメージや「きれいである」「おしゃれである」などの外見的魅力については、女性性意識の因子としては表れたものの、女らしさに対する態度とは関連がないことが示された。

娘世代は、FCS[世の中]および FCS[自分自身]の【人間的魅力】、そして FCS[自分自身]の【伝統的イメージ】と、AFS の【肯定的態度】との間でそれぞれ有意な正の相関 ($r = .379, p < .001$; $r = .314, p < .01$; $r = .281, p < .05$) が認められた。FCS と AFS の【否定的態度】とは有意な相関は認められなかった。つまり娘世代は、女らしさに対する肯定的態度と、世の中でも自分自身の中でも女性性のうちで人間的魅力と関連が高いと考え、かつ、自分の中では伝統的イメージとも関連が高いと考えていると推察される。なお、外見的魅力や否定的イメージについては、女性性意識の因子としては表れたものの、女らしさに対する態度とは関連がないことが示された。

これらのことから、母親世代の場合、女らしさに対して肯定的態度をとる人も否定的態度をとる人も、世の中であれ自分自身であれ、女らしさに

対する態度とネガティブなイメージとの関連が高いと考えられる。それに対して娘世代の場合、女らしさに対する態度と比較的ポジティブなイメージとの関連が高いという結果になり、世代によって女性性についての意識と態度の関連が異なることが明らかとなった。

まとめ

本研究の結果から、現代日本の中年期女性が女性性をどのように捉えているかを把握するための基礎資料が得られた。

まず女性性意識について、今回の対象者は全体的に中程度には重要であると捉えているが、中年期女性は女子青年と比較すると重要と感じていないようである。また、人間的魅力は世の中一般より自分自身は重要視していると考え、外見的魅力といわゆる否定的イメージは、世の中一般より自分自身の方が重要視していないと考えていることが示された。特に外見的魅力については、女子青年よりも、そして自分自身としても世の中一般よりも重要視していないと感じていることが示唆される。

女らしさに対する態度については、女子青年の方が中年期女性と比較して肯定的態度が有意に高い結果となったが、得点そのものの低さ(女子青年2.46、中年期女性2.08)を鑑みると、両者ともに肯定的態度をあまり重視しているわけではなく、否定的態度(女子青年1.82、中年期女性1.87)は殆どもっていないと解釈できる。つまり、女らし

さに対して女性自身が距離を置き始めているとも考えられる。

女性性意識と女らしさに対する態度との関連については、中年期女性は、女らしさに対して肯定的態度をとる人も否定的態度をとる人も、世の中であれ自分自身であれ、否定的イメージと正の相関が見られたことから、女らしさに対する態度とネガティブなイメージとの関連が高いと考えられる。一方女子青年は、肯定的態度をとる人は人間的魅力や伝統的イメージと正の相関が見られたことから、女らしさに対する態度と比較的ポジティブなイメージとの関連が高いという結果になり、世代によって女性性についての意識と態度の関連が異なることが示された。

今後の課題

最後に、本研究の課題を3点挙げる。

第一に、本研究で FCS と AFS を開発したが、いずれも Cronbach の α 係数の算出によってそれぞれの下位尺度の内的整合性は示されたものの、信頼性と妥当性の検討が行われていない。従って、次の段階でそれらが検討される必要がある。特に AFS については言えば、2 下位尺度の累積寄与率が 37.85% と非常に低い。なお、オリジナルの AMS も予備調査での累積寄与率は 41.4% であり同様に低く、そのためか本調査では各下位尺度項目の中で因子負荷量の高いものを中心にかなり数を絞り、17 項目としていた。その結果、本調査での AMS の累積寄与率は 45.0% と上がっており説明率として妥当なものと思われる。つまり、今回開発した AFS についても今後の使用にあたり、何らかの工夫が必要となるかもしれない。

第二に、本研究では女性性意識に関する検討により、女性性意識の因子として外見的魅力である【容姿・容貌】因子が表れたものの、中年期女性はとりわけ重要視していないという結果となった点と、「女らしさ」に対する態度に関する検討により、現代日本女性は女らしさから距離を置き始めているのではないかということが推察された点である。昨今、テレビのドキュメンタリー番組（日本放送協会，2007）などでは美を追求する中高年が注目されている。また、50代女性向けのファッション・美容などを中心とする雑誌が相次い

で創刊されており（日経 B P 社，2007）、さらに中高年女性向け化粧品が次々と発売され（日経 B P 社，2008）、大手化粧品メーカー各社も中高年世代への商品の販売強化に乗り出している（全国新聞ネット，2009）という記事もある。ということは、これらの市場を支えているのが必ずしも若年層ばかりではなく中年期女性も数多く含まれていることを考えると、一体何のために、そして何が中年期女性を美への関心へと駆り立てるのだろうか。

第三に、本研究で開発した FCS と AFS の相関を検討した結果、中年期女性は女らしさに対する態度と女性性についてのネガティブなイメージとの関連が高い結果となり、女性性の比較的ポジティブなイメージとの関連が高い結果となった女子青年と、女性性についての意識と態度の関連で顕著な差異が示された点である。なぜこのような世代間の差異が生じたのであろうか。このことから、中年期女性の女性性に焦点を当てた更なる研究が必要である。

今後は、FCS や AFS を洗練させつつ、このような中年期女性と美への関心、具体的には美しくなるための取り組みであるいわゆる「容姿向上努力」について、どのような内容なのか、そして何のため、若しくは誰のために行うのかなどの、より本質的な部分を詳細に分析しつつ、女性性との関連も引き続き検討していくことが必要であると考える。

引用文献

- 東清和（1986）．男性性・女性性の二元的モデル
早稲田大学大学院文学研究科紀要，32，39-49.
- Bem, S. L. (1974). The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155-162.
- 江原由美子・長谷川公一・山田昌弘・天木志保美・安川一・伊藤るり（1989）．ジェンダーの社会学—女たち／男たちの世界— 新曜社
- 林真一郎（2005）．男性役割と感情制御 風間書房
- Heilbrun, A. B. (1976). Measurement of masculine and feminine sex role identities as independent dimensions. *Journal of Consu-*

- Iting and Clinical Psychology*, 44, 183-190.
- 飯野晴美 (1984). 「性役割」という概念の多面性
心理学評論, 27, 158-171.
- 石田英子 (1994). ジェンダ・スキーマの認知相
関指標における妥当性の検証 心理学研究,
64, 417-425.
- 石崎優子・石崎達郎・桂戴作・織田正昭・日暮
眞・原節子 (1996). 母性性に関する心身医
学的研究 (第1報) -現代の日本人のもつ母
性性のイメージについて-心身医, 36, 468-
474.
- 伊藤裕子 (1978). 性役割の評価に関する研究
教育心理学研究, 26, 1-11.
- 伊藤裕子 (1986). 性役割特性語の意味構造-性
役割測定尺度 (ISRS) 作成の試み- 教育心
理学研究, 34, 168-174.
- 伊藤裕子 (1997). 青年期における性役割観の形
成 風間書房
- 岩谷澄香 (2001). 閉経前後の女性の生活および
性に関する認識, 神戸市看護大学短期大学部
紀要, 20, 39-49.
- 神田道子 (1993). 性差別の変動過程を説明する
「折り合い行動」概念 女性学研究会編ジェ
ンダーと性差別 勁草書房 pp. 22-41.
- 柏木恵子 (1974). 青年期における性役割の認知
Ⅲ-女子学生青年を中心として- 教育心理
学研究, 22, 205-215.
- 日経BP社 (2007). 「50代女性向け」宣言する
雑誌が続々創刊～読者のハートをつかみ切れ
るか」nikkei BPnet 時評コラム 松本す
み子の団塊消費動向研究所 2007年5月30日
<[http://www.nikkeibp.co.jp/style/biz/
feature/dankai/070530_soukan/](http://www.nikkeibp.co.jp/style/biz/feature/dankai/070530_soukan/)> (2009年
1月25日)
- 日経BP社 (2008). 「『一度ファンになると長い』
は本当か 化粧品に見る“女”を捨てない団
塊女性たち」nikkei BPnet 時評コラム 松
本すみ子の団塊消費動向研究所 2008年10月
30日 <[http://www.nikkeibp.co.jp/article/
column/20081030/108888/](http://www.nikkeibp.co.jp/article/column/20081030/108888/)> (2009年1月
25日)
- 日本放送協会 (2007). NHK スペシャル「ビュ
ーティー☆ウォーズ」(2007年9月24日)
- 瀬戸山聡子 (2009). 女性性に関する研究の動向
と展望について-生涯発達の視点の必要性-
昭和女子大学女性文化研究所紀要, 36, 15-32.
- Spence, J. T., Helmreich, R. L., & Stapp, J.
(1975). Ratings of self and peers on sex
role attributes and their relation to self-
esteem and conceptions of masculinity
and femininity. *Journal of Personality
and Social Psychology*, 32, 29-39.
- 鈴木淳子 (1991). 平等主義的役割態度: SESRA
(英語版)の信頼性と妥当性の検討および日
米女性の比較 社会心理学研究, 6, 80-87.
- 山口素子 (1985). 男性性・女性性の2側面に
ついでに検討 心理学研究, 56, 215-221.
- 油井邦雄 (1995). 女性性の概念とその実証的
検証 宮本忠雄(監) 油井邦雄(編) 女性性の
病理と変容-現代社会における女性性とその
逸脱構造- 新興医学出版社 pp. 1-26.
- 全国新聞ネット (2009). 「『年取ってもお化粧』
世代に照準 各社、中高年へ販売強化」
47NEWS 共同ニュース 2009年1月10日
<[http://www.47news.jp/CN/200901/
CN2009011001000296.html](http://www.47news.jp/CN/200901/CN2009011001000296.html)> (2009年1月25日)

謝 辞

本論文の作成にあたり、質問紙調査にご協力く
ださいました皆様に深く感謝いたします。また、
AFS の開発にあたり、もととなる AMS の使用
を御快諾下さいました和光大学現代人間学部准教
授 林真一郎先生に心から御礼申し上げます。

(せとやま あきこ 生活機構研究科生)

(ふじさき はるよ 生活機構研究科)